

橋本左内の生誕地に関する一考察

西村 英之

はじめに

幕末福井の橋本左内（天保五年（一八三四）～安政六年（一八五九））は、福井城下の常盤町に、藩医を勤める父長綱と母梅尾の長男として生まれた。城下の北西辺り、南北に走る北陸道沿いの下呉服町から、東に折れた東西の町並みが常盤町で、橋本家の屋敷は通りの北側に位置していた。^①この場所で左内は、両親と天保二年生まれの姉烈子、同十二年生まれの次弟綱維、弘化二年（一八四五）生まれの末弟綱常と共に暮らした。

明治七年（一八七四）の町名改正により、常盤町は大和上町の一部となり（改正時の戸数は三五）、昭和三十九年（一九六四）に春山町の一部、同四十二年からは春山二丁目の一部となっている。^②

現在、生誕地周辺は閑静な住宅地で、民地の一角に左内の『産湯の井』と伝える井戸（傍らに大正十三年（一九二四）十一月八日刻

銘「常盤の井」の標石が建つ）が現存している。他にも「橋本左内宅跡」の石標や「御物啓発録」の石碑（昭和三十年三月十一日刻銘）などがあり、毎年四月十一日には、「橋本左内先生顕彰会」（会長は福井市長）によって生誕祭（祭典委員長は福井市春山公民館長）が営まれている。^③

ところで、人々が『生誕地』と伝える、言わば記憶の空間は、いつどのように生まれ、受け継がれてきたのであろうか。一見、そこは古くからの記憶を留めているようにも見えるが、少なくとも安政元年（一八五四）六月の城下の大火、明治三十五年（一九〇二）三月の橋北大火、昭和二十年（一九四五）七月の福井空襲、同二十三年六月の福井地震によって、その面影は失われたはずである。

本稿では、こうした視座から生誕地を捉え、若干の考察を試みようとすることである。ただし、戦震災以降については、不明な点も少なくないことから割愛せざるを得なかった。



写真1 生誕地の現況（東側から撮影）



写真2 同（北側から撮影。手前が「常盤の井」と標石〈裏面〉）

一 生誕地の表示

橋本左内の生誕地において、その表示が大々的になされたのは、明治四十五年（一九一二）三月に建立された、「景岳先生生誕之地」（福井県知事・中村純九郎揮毫）の石標をもって嚆矢とする（現存していない）。郷土史の先覚、山田秋甫編『橋本左内言行録』（橋本左内言行録刊行会、昭和七年（一九三二）に、山田が「歿後の光栄」として紹介している。その中で、

本件は春山小学校長五十嵐均平氏が担当幹旋して完成したのである。中村氏は同月二十八日（明治四十五年三月―引用者注）、広島県知事に栄転したが、世人の始めて石標建立に目を注ぐやうになつたのは、実に此の栄転後であつた。

とあって、石標の建立は春山小学校長五十嵐均平（明治八年―昭和四十二年）の担当幹旋によるものとしている。

当時、春山小学校（正しくは福井市春山尋常小学校）は春山上町にあって、生誕地の北約三三五メートルの地点に位置していた（現、田原二丁目二の春山公園内に旧校舎の碑がある。郊外の現在地に移転したのは昭和十六年）。校長は、明治四十一年七月十日に着任した松原富で、五十嵐ではない。^④

五十嵐は、生誕地に近い春山下町に住んでいたが（現、春山一丁目三、生誕地の北東約一七五メートル）、明治四十年四月八日に広島高等師範学校へ訓導として赴任し、続く同四十四年十一月十日から大正五年（一九一六）四月五日までの間、京都市内の小学校で訓

導や校長として教員生活を送ったので、建碑に深く関わる状況には無かつたものと思われる。^⑤

一方の中村純九郎（嘉永六年（一八五三）―昭和二十二年）は、明治四十年十二月二十七日に福井県知事に就任し、同四十五年三月二十八日に広島県知事に転じたので、山田の記述に矛盾は見られない。^⑥ それでは、松原が建碑を担当幹旋したのであろうか。ここで、その動機や背景を探るため、左内の在世中から建碑までにおける、生誕地の景観変化について考えてみたい。

橋本家の屋敷は、左内が江戸遊学中の安政元年（一八五四）六月十三日、福井城下の大火で類焼した。父長綱は二年前に他界しており、心配した親戚が左内を呼び戻すよう母梅尾に勧めたが、息子の修学を中断するに忍びないとしてこれに応じなかったという。その後、屋敷は修築や建替え等が行われたはずであるが、その詳細は明らかでない。^⑦

また、類焼した年の十月、姉烈子が鯖江藩士木内左織の許へ嫁すとともに、^⑧同六年十月の左内刑死後は、末弟の綱常が慶応二年（一八六六）に福井藩剣術師範鰐淵三郎兵衛の娘操子を嫁として迎えるなど、家族構成にも変化が見られる。操子は義兄の綱維と一家同棲し、義兄を大旦那、夫を若旦那と呼んで暮らしたが、綱維は三年目に別家して足羽山へ転居した。明治三年（一八七〇）、綱常が大阪の兵部省軍事病院医官に任命されると、操子も翌四年に同地へ転居し、さらに同年十月、同病院の東京移転に伴って綱常が上京すると、操子も翌五年春に上京した。^⑨

その後、生誕地には明治十六年（一八八三）十月に、真宗大谷派の専念寺が照手下町より移転してきている。¹⁰ 明治以降の家族の動静には一々触れないが、母梅尾は同五年春から東京で綱常一家と暮らし、同十五年六月十六日に没しているの、そのことが寺地が変わった大きな要因でもあろう。¹¹ これによって、生誕地の景観は一変したが、門の脇（東側）にはなお、通りに面して左内の居室であったと伝える土蔵が遺存し、わずかに面影を留めていた。しかし、それも同三十五年三月の橋北大火で姿を消した。¹²

この大火では、三月三十日の午前三時三十分市内の佐佳枝中町（現、順化二丁目）で発生した火災が、折からの南東の風（北陸の春特有のフェーン現象）に煽られて市内の広範囲に拡大した。生誕地周辺にも及び、翌朝七時頃には春山尋常小学校の本校舎が類焼している。¹³

以上のような景観変化を踏まえた上で、改めて建碑の動機を考えると、その時点では何よりも生誕地の表示が優先されたのではなからうか。ここで注目されるのは、その四年前、明治四十一年七月七日に専念寺で執り行われた、大和区（旧大和上町を中心とする居住区）有志による左内五十年祭である。¹⁴

詳細は明らかでないものの、午後一時から春山尋常小学校職員・児童も参拝している。恐らく、没後五十年をきっかけとして建碑の計画が持ち上り、校長はじめ地元有志によって知事への揮毫依頼がなされたものと推察される。ちなみに、七月七日時点の校長は、松原富の着任直前に在籍していた加藤操作（明治三十四年八月二十九

日着任）である。¹⁵

二 橋本家による旧邸図の作成

生誕地に石標が建立された頃、東京の橋本家では、常盤町にあった屋敷の平面図（以下、「旧邸図」と称す。）が作成されている。橋本綱常の妻として、左内刑死後の慶応二年（一八六六）に橋本家へ嫁いだ操子が、当時の記憶をもとに作成したものである。その手法は、操子が外孫（政子の子）の信太郎に口述しながら描かせ、それを図面が書ける人に依頼して清書させている。後に、左内の伝記や関係書籍にも掲載され、広く知られるようになった。¹⁶

外孫の信太郎とは、のちの中国文学者で随筆家の奥野信太郎（明治三十二年（一八九九）～昭和四十三年（一九六八））のことで、昭和三十六年の『歴史読本』に掲載された随筆「ひとつの図面」（随筆集『中庭の食事』論創社、一九八二年所収）に、中学時代のエピソードとして紹介している。同じく『中庭の食事』所収「わが十代の思い出」（昭和三十二年二月十六日付毎日新聞）に、

ぼくは中学時代の全部を下町に住み、下町の中学に通ってくらした。もつとくわしくいえば、浅草左衛門町に住み当時神田淡路町にあった開成中学に学んでいたのである。

とあり、当時は私立東京開成中学校に在籍していた。

旧邸図の作成時期は定かでないが、信太郎の入学年齢を十三歳、修学年数を五年とした場合では、明治四十四年（一九一一）～大正

四年（一九一五）の間の出来事ということになるうか。操子が四六（五〇）歳の頃で、すでに義兄の綱維は明治十一年（一八七八）六月、義姉の烈士は同三十五年十月、夫の綱常は同四十二年にそれぞれ他界しているので、橋本家の身内では操子が屋敷の詳細を知る唯一の存在であった。¹⁷

当時、信太郎は毎週土曜日に「品川の八ツ山から京浜電車にのりかえて、浜川の祖母の隠居所に泊まりにいった」（ひとつの図面）が、ある日、操子の口述に従って図面を描くこととなり、物差しと鉛筆を持って紙に向かった。その時の様子を「ひとつの図面」では、次のように回想している。

祖母はぼくの手もとをみながら、門の右手に土蔵、玄関横に井戸がひとつ、邸の裏に用水堀といったように一々指図する。ぼくは指図されるとおり、寸法を計りながら一間を三分だか五分だかのわりあいにして図をひいていった。図だけではなく、ところどころ文句もメモしなければならぬ。

「その土蔵のお二階が左内さんのお書斎になっていた。ひろさは十畳……」

ぼくは母屋の外、門側の土蔵のなかで、本を読んだり詩をつくったりしている左内のすがたを想像する。

すなわち、本図は三十数年前の操子の記憶を基にした、言わばイメージ図と言える。操子は図面の完成を大層喜び、「その図面を複製しては、あっちこちに配った」（ひとつの図面）という。

それらが、生誕地の有志の手元にも届いたのか定かではないが、

前出『橋本左内言行録』に山本匡輔（旧福井藩士・医師）は、「橋本旧邸の図面」と題して

橋本旧邸ノ図面ハ安政元年七月、大火ノ類焼以後ノ家屋図ニシテ、春山小学校校長ノ発意ニテ、先生産湯ノ井戸ヲ修復セルト同時ニ、在東京未亡人ノ記憶ヲ喚起セルモノナルガ、

と記している。産湯の井戸の修復は、後述するように大正十四年（一九二五）のことで、校長は五十嵐均平であるから、五十嵐が在京未亡人の操子に旧邸図の作成を働きかけたとするのは誤りである。

しかし、専念寺における左内没後五十年祭や「景岳先生生誕之地」石標の建立など、生誕地の動向を考え併せると、作図の動機が単なる懷古ではなく、地元有志の熱意によって作図された可能性も否定できないのではなからうか。

あるいは、東京における左内の顕彰団体「景岳会」¹⁸による、『橋本左内全集』（全一冊）の出版（明治四十一年六月）が呼び水になったとも言えないが、もともと同書への掲載を目的に作図されたものではない。

いずれにせよ、本図によって「左内が生れそして育っていった代々の福井における医家橋本の古い邸内の雰囲気がほぼ見当がつけるようになった」（ひとつの図面）ことの意義は大きい。それは、生誕地側からすれば、誰もが景観とは無関係に左内の生まれ育った邸内をイメージできるということであり、新たな記憶として継承するに値するものと言えよう。

後年、奥野は昭和三十五年（一九六〇）の夏、夫人と共に初めて

福井市を訪れ、生誕地に立ち寄った。「ひとつの図面」には、

もはやかつての邸址全域は、人家がたてこんでしまっている。

ぼくはふと祖母がぼくに描かせた図に、裏の境界が用水の流れになっっていることを思いだした。なるほどいまでも邸の境界とおぼしきあたりに溝が流れ、小さな石の橋がかかっている。そこまですでに邸内であつたとすると、かなりのひろさであつたわけだ。午後の灼けつくような日光のなかで、ぼくは感慨ぶかくいつまでもそこにたたずんでいた。

と回想している。「人家がたてこんでしまっている」現実空間に立つて、旧邸図という疑似空間に浸りながら、「感慨ぶかくいつまでもそこにたたずんでいた」のであつた。

三 井戸の修復と保存

明治三十五年（一九〇二）三月の橋北大火により、専念寺の門脇に遺存していた左内ゆかりの土蔵が焼失し、その十年後、同地に生誕地を示す石標が建立されたことは、すでに述べたとおりである。

左内の面影を留める建物が失われたことで、生誕地に対する人々の関心も薄れていったものと想像される。

そのような中で、境内の片隅に眠る古井戸に着目し、これに光を当てたのは、大正十一年（一九二二）十二月十二日から同十五年・昭和元年十二月末日までの間、春山尋常小学校の校長を務めた五十嵐均平である。^①『景岳会小史』（景岳会、昭和十年）に、大正十三年

（一九二四）十一月八日の皇太子殿下福井行啓における記念事業の一つとして、次のように見えている。

福井市立春山小学校校長五十嵐均平氏は、景岳先生の旧邸址、今専念寺境内に在る先生産湯の井戸を保存修築し、之を不朽に伝へんが為め、関係有志者と相謀り、種々尽力の末、遂に翌年三月十五日を以て、其竣成を告げた。

この「先生産湯の井戸」とは、橋本家による旧邸図作成の際、操子の口述に「門の右手に土蔵、玄関横に井戸がひとつ^②」とある、玄関横の井戸を指す。橋北大火後は焼損もあつてか、地元の者でさえその存在を知る者は少なかったようである。

春山尋常小学校では、行啓記念事業の取り組みと同時に創立五十年を迎え、大正十五年六月に『春山教育五十年史』を刊行しているので、これにより事業の概要を見ておきたい。^③

本事業では、「産湯の井」と伝える井戸を修復し、それを「常盤の井」と命名するとともに、傍らに「常盤の井の標石」（大正十三年十一月八日〈福井行啓日〉の刻銘）を設置した。そして標石については、同十四年三月十五日午後一時から、「春山教育会、春山青年会、春山同窓会連合会」の主催で、関係者が石引きしながら専念寺境内へ運び入れ、その際の「石ひきの歌」は次のとおりであつた。

一、目ためためた、常盤の井戸よ、建てるしるべの この巖。
二、めためためた、常盤の井戸よ、水は汲めとも 尽きず。
また、当日祝いとして、「東京市橋本家より金五圓」が贈られており、橋本家の賛意を得たものでもあつた。

石引きを共同開催した春山教育会は、もともと区民八名が「春山小学区子弟教育の完成を企図せんと斡旋尽力」し、明治二十六年（一八九三）に発足した春山校区の教育関係団体で、発足当初の会員数は一七九名、校長の萩原文平が会長を務めた。大正十三年（一九二四）には、会員数が名誉会員二五八・特別会員一五・通常会員二二五と増加し、これに今回、青年会や同窓会連合会が加わって石引きが行われた。行啓記念として、春山校区挙げての一大行事であったが、校長としての五十嵐の責任は、殊のほか大きかったものと思われる。五十嵐の人物について、後任の吉田利修の回想「前校長五十嵐均平先生」（春山百年史編纂委員会編『春山百年史』福井市春山小学校・創立百年事業委員会、昭和五十一年（一九七六）所収）に

学習指導教育課程の改善に努力研究せられ、研究授業や名士の講演会等を催し、教育者に有益なる刺激を与えられ、教育の進展を計られた。又保護者が家庭に於ても児童教育に一層努力するように各種の会合を催され、教師と保護者との接触の機会を造られた。保護者会、野球後援会等もその一つである。

とあって、熱心な教育者であったことが知られる。既述のとおり、五十嵐の春山尋常小学校着任前の出来事である、石標の建立や橋本家による旧邸図の作成をも、すべて五十嵐の尽力によるものとする、『橋本左内言行録』（前出）の記述ぶりからしても、五十嵐が井戸の修復と保存に、いかに深く関わっていたかを物語るものと言えよう。いずれにしても、これによって人々の記憶を呼び覚まし、境内の片隅に放置されていた井戸が、左内の産湯の井戸として後世に

語り継がれることとなった。

そして、その後も地元では、昭和九年（一九三四）六月十一日に専念寺において百年祭の斎行と遺墨及び関係書籍等の展覧が行われるなど、左内への関心が高まった。⁽²²⁾

しかしながら、皇太子殿下福井行啓の記念事業として整備された生誕地は、同二十年七月十九日深夜の福井空襲によって被災した。B-29爆撃機一二七機による八一分間に及ぶ爆撃は、市中心部に位置する福井城址の北西付近を中心に、半径一二キロメートルの範囲に及び、八六五トンの焼夷弾が投下された。市街地の損壊率は、八四・八パーセント（米軍評価）とされる。⁽²³⁾

生誕地は、福井城址の北西地点（内堀の北西角）から西北西方向へ約五七五メートルしか離れておらず、被害の大きさが想像できよう。

さらには、復興途上にあった同二十三年六月二十八日午後四時十三分、丸岡町（現、坂井市丸岡町）を震源とする福井地震（マグニチュード七・一、最大震度六）によって、福井市は再び甚大な被害を被った。⁽²⁴⁾

専念寺については、福井県総務部文書学事課発行の『福井県宗教学人名簿』⁽²⁵⁾に、所在地「福井市春山2丁目」、代表役員「荷葉《はすば》賢正、登記年月日「S 28. 9. 1」と見えており、昭和四十二年（一九六七）一月一日現在の名簿では、住所が「大安寺町江上」（現、福井市江上町）となっている。また、福井市仏教会発行『福井市寺院名簿』（同四十三年三月十三日発行）では「昭和二十年戦震災後不詳」としている。戦震災によって、生誕地の景観は再び変貌する

こととなった。

現在、生誕地に足を運ぶと、「産湯の井戸」と「常盤の井の標石」を見ることが出来る。石製の井戸枠は造り替えたものかどうか判然としないが、標石は火熱を受けて黒く変色し、ひび割れなどもあって補修の痕が認められる⁽²⁶⁾。

二度の災害を被りながらも、左内を想起させる唯一の遺構として、再び井戸の修復・保存に着手したのは誰なのか、必ずしも明らかではない。寺地から民地へと変わる中で、土地所有者の特段の理解と協力に支えられてきたことは想像に難くないが、そこには、生誕地を強く意識し、井戸を守り伝えようとする人々の強い意志さえ感じられる。

生誕地に立って、旧邸図と照らし合わせる時、屋敷の位置関係や凡その規模、間取りなどの見当がつくのも、この井戸が旧邸図の基準点でもあるかのように、現に存在しているからこそであろう。もちろん、戦震災後の復興計画に基づく道路整備において、新しく舗装し直された生誕地前の東西の通りが、ほぼ旧藩時代と位置的に変わっていないことや、屋敷裏の用水が、現在も目に見えて流れていることも、理解を助けている。

ところで、井戸の修復と保存は、言うまでもなく「左内の産湯の井戸」として進められたものである。しかし、それとは別に、医家に備えられた井戸として、その用途に目が向けられることは無かったようである。それは、橋本家による旧邸図作成の際、操子が本井戸について「在方から診察をうけにくるお百姓さんたちが足を洗う

ためのもの」と口述しているからである（「ひとつの図面」）。

旧邸図によって、井戸の場所を再確認しておこう。橋本家の門から屋敷へ入ると、正面に母屋の玄関が見え、門の右脇、すなわち東側に土蔵がある。玄関に向かって進み、土蔵を過ぎると右手に井戸が見えてくる。そこは玄関のすぐ外側（南東側）で、在方からの来訪者（患者）は、ここで足を洗い、玄関（六畳）から左手（南西側）に張り出した「薬局」に通されたものと思われる。

旧邸図には、その旨の注記がないので、操子の口述内容がどこまで一般に伝わったのか判然としない。現に、福井においても、この点に言及しているものは無いようである⁽²⁷⁾。

旧邸図を見ると、母屋の「台所」にも井戸が一つ確認できる（丸に「井」の印が付されている）。北側に「湯殿」があるので、生活水を賄うための井戸であったことが理解できる。しかし、左内の産湯に使われた水は玄関外の井戸で汲んだと伝えているので、どこを産室としたのか、母梅尾の出産を考える上でも興味深い。

いずれにしても、「左内の産湯の井戸」として修復・保存に力を入れてきたことが、結果として戦震災を乗り越え、今日に受け継がれたとも言えるのではなからうか。

四 書籍による生誕地の紹介

奥野の随筆「ひとつの図面」に、操子が完成した旧邸図を複製して「あっちこっち」に配布したので、その後「左内の伝記その他の

巻頭に、よくその図面が掲載されたものをみかける。」とある。伝記その他、関係書籍に取り上げられたことは、世間の注目を集めただけでなく、生誕地の記憶を世間に広め、永く後世に伝える上で格好の伝達手段を得たことになろう。

そこで、戦前に刊行された左内関係書籍の内、旧邸図に言及しているものを取り上げると、管見の限り次のとおりである（初出・刊行順）。

- 一 滋賀 貞『偉大なる青年 橋本左内』口絵、武蔵野書院、昭和三年（一九二八）。
 - 二 山本匡輔「橋本旧邸の図面」（山田秋甫編『橋本左内言行録』所収。橋本左内言行録刊行会、昭和七年）。図版無し。
 - 三 景岳会『橋本景岳全集』口絵、昭和十四年。
 - 四 「橋本家の宅址と常磐の井」写真と解説（景岳会『景岳橋本左内遺墨帖』所収、昭和十八年）。
- 同じく、産湯の井戸（常磐の井）についても確認すると、次のとおりである（初出・刊行順）。
- イ 滋賀 貞『偉大なる青年 橋本左内』口絵、武蔵野書院、昭和三年。
 - ロ 山田秋甫「常磐の井戸」（山田秋甫編『橋本左内言行録』所収。橋本左内言行録刊行会、昭和七年）。図版無し。
 - ハ 景岳会『景岳会小史』口絵、昭和十年。
 - ニ 滋賀 貞『景岳 橋本左内』口絵、武蔵野書院、昭和十年。
 - ホ 景岳会『橋本景岳全集』口絵、昭和十四年。

西村 橋本左内の生誕地に関する一考察

へ「橋本家の宅址と常磐の井」写真と解説（景岳会『景岳橋本左内遺墨帖』所収、昭和十八年）。

さらに、これらを大別すると、次のようになる。

【伝記】

- ① 滋賀 貞『偉大なる青年 橋本左内』口絵、武蔵野書院、昭和三年。……（旧邸図・産湯の井戸）
- ② 山田秋甫編『橋本左内言行録』。橋本左内言行録刊行会、昭和七年。図版無し。……（旧邸図・産湯の井戸）
- ③ 滋賀 貞『景岳 橋本左内』口絵、武蔵野書院、昭和十年。……（産湯の井戸）

【史料】

- ④ 景岳会『橋本景岳全集』口絵、昭和十四年。……（旧邸図・産湯の井戸）
- ⑤ 景岳会『景岳橋本左内遺墨帖』、昭和十八年。……（旧邸図・産湯の井戸）

【その他】

- ⑥ 景岳会『景岳会小史』口絵、昭和十年。……（産湯の井戸）
- すなわち、山田秋甫編『橋本左内言行録』②を除けば、滋賀貞①③及び景岳会④⑤⑥の著作刊行物ということになろう。
- 昭和三年（一九二八）に刊行された、滋賀の『偉大なる青年 橋本左内』①は、「若い人達を前に置いて御話する積になつて書いた」（巻頭に一言）青少年向けの伝記である。口絵に六枚の図版を載せ、「橋本左内先生像」（佐々木長淳画）、「左内先生筆蹟」に続

いて三番目に「常盤の井（先生産湯の井）」（写真）、四番目に「先生居宅平面図（←が先生の書斎）」が掲載されている（五番目に「先生三條實萬公に入説の図（實萬公翁巻物の一部）」、六番目に「左内先生の墓（福井善慶寺内）」）。本書は、五年後に増補改訂版が出された。

同じく『景岳 橋本左内』（③）は、前著（①）を基に増補改訂し、左内の正伝として一般向けに執筆されたものである。口絵には、常盤の井の写真があつて、「常盤の井（左内産湯の井戸にして福井市大和上町専念寺境内に在り）」と説明されている。旧邸図は掲載されていない。

刊行年の昭和十年は、左内の生誕百年に当たることから、東京日本橋の百貨店白木屋では、景岳会主催の展覧会「橋本左内先生生誕百年記念展覧会」が文部省後援のもとで開催された。橋本左内という人物に多くの関心が集まった年であり、本書も時機を得た好著として、昭和十六年までに七版を重ねた。

なお、景岳会主催の展覧会は、祭壇及び十一の展示区から構成されており、展示総数二九四件を数えた。その内、生誕地関係では第二区「景岳先生の生誕及幼少時代（一歳―十五歳）」に、「一五 先生旧宅の図 一枚 藜園会蔵」「一六 常盤井の写真、及び記（先生産湯の井戸） 一枚 五十嵐均平氏蔵」「一七 同拓本 一枚 同」の三点が出品されている。⁽²⁹⁾

ここで、著者の滋賀貞について少しふれておきたい。前掲『偉大なる青年 橋本左内』（①）の「三、幼少時代」に、自ら次のように記している（ただし、ルビは省略）。

私の生まれた家は鍵町といつて、幅二間位の芝原用水といふ小川を隔て、先生の住まれた常磐町に接してゐましたから、云はゞ背中合せに住んでゐました。それに先生の幼少の頃、祖父の小林弥十郎に書を習ひに來られましたし、私の父は先生と同年であつて自然親しく交つたやうでありますから、子供の時分ちよい／＼先生の話を聞かされました。

滋賀は明治十年（一八七七）十二月、滋賀有作の次男として福井市春山下町（旧鍵町。現、春山二丁目）に生まれた。⁽³⁰⁾ 鍵町は常盤町の北に隣接し、同じく北陸道沿いの下呉服町から、東に折れた東西の町並みである。⁽³¹⁾ 祖父の小林弥十郎（享和三年（一八〇三）―明治十四年）は、福井藩の右筆として活躍した人物で、左内の幼少期の師でもあつた。⁽³²⁾

また、滋賀が生まれて四半世紀の間は、専念寺となつた左内の生誕地に、左内の居室と伝える土蔵が遺存しており、左内を身近に感じられる環境にあつた。そうした中で、滋賀自身も父親などから左内の逸話を聞いて育ち、「叔父さんでゝもあるやうな親みを持ち乍ら先生に対して景慕の念を懷いてゐました」（①「巻頭に一言」と記している）。

その後、同二十九年に福井中学を首席で卒業し、第四高等学校（金沢市）を経て東京帝国大学に入学し、国史学を学んだ。卒業後は、同三十七年から同四十二年まで奈良県畝傍中学、同四十二年から大正二年（一九一三）まで福井中学で教鞭を執り、さらに同二年から同八年まで千葉県佐倉中学校長、同八年から山口県岩国中学校長に

転じたが、同十一年病のため辞任し、以後は東京の立教中学の監事を務めた。昭和十九年（一九四四）三月没。

ところで、上京中の明治三十五年（一九〇二）九月、滋賀は郷里出身者の社交団体「福井会」（現、東京福井県人会）の監事で、同年十月に組織化された「景岳会」の創立委員でもあった今立裕を訪ねたことから、景岳会の活動に二年余り関わることとなった。それは、小塚原の回向院（荒川区南千住）で齋行されることとなった墓前祭の世話役である。当時、景岳会の事務局は郷里出身学生を支援する育英団体「輔仁会」（現、公益財団法人 輔仁会 明倫学舎）に置かれていたことから、輔仁会での準備会合等に参加する中で、多くの知己を得たものと思われる。同三十七年には、東京を離れて奈良県へ赴任したので、墓前祭に直接関わることは無くなったが、その後も景岳会とは関係を保った。³³

景岳会の刊行物（④⑤⑥）を見ていくと、それぞれの序文や例言などから滋賀が編纂に深く関わっていたことが知られる。

すなわち、『景岳会小史』（⑥）は、同会の評議員で元福井市長の永井環が編纂した沿革史であるが、滋賀は資料提供などで協力している。また、『橋本景岳全集』（④）では、同会評議員永井環及び幹事芦田伊人と共に編纂委員に名を連ねている。さらに『景岳橋本左内遺墨帖』（⑤）では、編輯主任という立場にあった。すでに、教員を退いてからは、東京府北豊島郡長崎町大和田（現、東京都豊島区）に家族と共に移り住んでいたこともあり、³⁴景岳会の刊行事業に深く関わった。

このように、滋賀の生まれ育った環境や大学での学び、景岳会との関わりがあったからこそ、書籍による生誕地の紹介も可能であったと言えよう。

ところで、滋賀による左内の伝記①③には、滋賀自身が父親から伝え聞いた、左内の逸話が紹介されている。橋本家と縁故が深く、左内と同年の者によって語られた逸話として信憑性も高く、生誕地のもう一つの記憶として興味深い。ここでは、『偉大なる青年 橋本左内』（①）の「三、幼少時代」から三つの話を取り上げる（ルビは省略）。一つ目は、橋本家の向かいに住んでいた安井某という老人の話。

橋本の直ぐ前に、安井某といふ老人が隠居して居たのですが、老人の事で朝は暗い内から起きるのですが、何時起きても先生の室には灯火がともつてゐるので、橋本の息子さんはいつ寝るのだらうかと怪しんださうです。

二つ目は、左内の読書法に関する話。

眼光紙背に徹するの意気を以て精読し、会心の場所があれば、これを抄録し、もし感動した文句があれば、之を小さい紙片に書き抜いて、机といはず本箱といはず、一面に貼付して、自分の規箴とされたさうです。で、先生の部屋へはいると色々の札がべた／＼貼つてあつて、弘法太師の霊場などに参詣した様であつたといふことです。

三つ目は、左内の十五歳時の話。

先生が十五歳の時に、弟の縄三郎（綱維、時に年八歳）を連れ

て私の祖父の所へ手習の弟子人に頼みに来られたさうです。其の時の応接振が如何にも行き届いて居て、逆も十五歳の少年とは思はれなかつたので、その時隣室に襖を隔て、聞いてゐた客人が、先生の帰られた後で、今来たお婆さんのやうな人は誰でしたかと尋ねて舌を捲いたといふ事であります。

いずれも、左内が早熟であつたことを物語るもので、人々の素直な驚きが伝わってくる。そして、書名の『偉大なる青年 橋本左内』から受ける印象とは異なり、早くから地道な努力を重ねてきたからこそ頭角を現し得たことに納得させられる。

本書は、青少年向けに執筆されたこともあつて、他にも多くの逸話が紹介されている。左内という人物に親しみを持ち、一層の関心を深める上で極めて有益である。しかし、それらが独り歩きして左内の人物像を歪めることのないよう、引用する際には特に注意を要する。滋賀自身も、『景岳 橋本左内』(③)を執筆する際、「逸事逸話などで怪しいと思ふものは一切除き去つた。」(巻頭言)と記している。

おわりに

日頃、当たり前のよう存在する「生誕地」も、実は様々な記憶が層を成す複合的な空間であり、そこには記憶を創出し後世に伝えようとした人々の確かな存在があつた。推論を重ねた部分も少なくないが、大方の批正を乞う次第である。

なお、本稿では左内の顕彰団体である東京の「景岳会」や、地元福井の「藜園会」との関係については、滋賀の場合を除いて言及しなかった。

戦前までに限れば、生誕地では主に地元の有志によつて慰霊・顕彰の取り組みがなされており、「景岳会」「藜園会」との積極的な連携や、永続的な顕彰団体の設立には至っていない。

恐らく、慰霊・顕彰の対象である左内の、墓石を有する葬地とそれを持たない生誕地との違いによるところが大きいのではなからうか。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、福井市春山公民館々長・嶋田伸行氏、五十嵐鈞有氏、瑞源寺住職・花房禪佑氏、福井大学附属図書館(総合図書館)、福井県文書館、福井県立図書館、福井市立郷土歴史博物館をはじめとする関係各位に大変お世話になりました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

註

(1)『福井県の地名』(平凡社、一九八一年)、『角川日本地名大辞典18 福井県』(角川書店、一九八九年)。なお、本稿では「常磐」と「常盤」を区別せず、常用の「常盤」に統一した。

(2)註(1)に同じ。「常盤町」は自治会名として存続している。

(3)『われらのほこり 橋本左内先生』(うらがまちづくり春山地区委員会・福井市春山公民館、一九九七年)、『春山のほこり 橋本左内先生』(春嶽公

と左内先生の春山づくり委員会・春山地区自治会連合協議会・福井市春山公民館、二〇一二年）。柳沢全之「橋本左内先生と生誕地の謎解き」（福井いきいき会講演レジュメ、二〇一七年十一月）。

(4) 『春山百年史』（福井市春山小学校・創立百年事業委員会、一九七六年）。

(5) 五十嵐均平自筆履歴書。『豊葦会会員名簿』第九号（豊葦会〈広島大学附属小学校同窓会〉、一九八八年度版）の口絵に、広島高等師範学校教員の集合写真（明治四十二年三月撮影）が掲載されており、五十嵐の在籍が確認できる。いずれも、五十嵐家所蔵資料。

(6) 『福井県史年表』（福井県、一九九八年）。

(7) 『橋本左内全集』（景岳会、一九〇八年）。その後、『橋本景岳全集』一（景岳会、一九三九年）では、口絵「橋本家邸宅平面図と常磐の井」の説明文に「此邸宅は其後漸次に建て増したもので、先生は留守勝であつたから、母堂がすべて計画を立て安政五年秋冬の頃完成したのである。」とし、同じく『景岳橋本左内遺墨帖』（景岳会、一九四三年）でも、「橋本家の宅址と常磐の井」の説明文に「留守を預る健気な母堂梅尾子が苦心して再建したのが図に示す通りである。間取の設計も母堂の考案によつたが、大体は旧宅に型どつたものの、やうである」として、類焼後の記述が加わる。

(8) 「鯖江藩日記」（鯖江市まなべの館蔵）安政元年十月十九日条及び同廿六日条。

(9) 橋本操子談「(1) 若旦那」（山田秋甫編『橋本左内言行録』橋本左内言行録刊行会、一九三二年所収）。『橋本綱常先生』（日本赤十字社病院、一九三六年）。

(10) 『橋本福井市史』下巻（福井市、一九四一年）。本書の第五篇社寺―二寺

院―第七章真宗「恵念寺」は、「専念寺」の誤植である（目次は正しい）。明治十三年三月開創。『福井市寺院名簿』（福井市仏教会、一九六八年）。

(11) 『橋本左内全集』（景岳会、一九〇八年）。

(12) 「橋本家の宅址と常磐の井」（景岳会『景岳橋本左内遺墨帖』所収、一九四三年）。

(13) 『福井市史』通史編3近現代（福井市、二〇〇四年）。『春山教育五十年史』（福井市春山尋常小学校、一九二六年）。

(14) 註(13)の『春山教育五十年史』に同じ。

(15) 註(4)に同じ。

(16) 奥野信太郎「ひとつの図面」〔中庭の食事〕論創社、一九八二年所収）。なお、原図の所在が明らかでないため、本稿では図1を『景岳橋本左内遺墨帖』（景岳会、一九四三年）より引用作成した。図中、玄関外の井戸（卍印）に注記された「常盤の井」については、大正十三年（一九二四）十一月に命名されたもので、旧邸図作成当初の書き入れではない。本稿「三井戸の修復と保存」〔四 書籍による生誕地の紹介〕参照。

(17) 『橋本綱常先生』（日本赤十字社病院、一九三六年）。

(18) 「景岳会の組織と藜園会の創立」（『景岳会小史』景岳会、一九三五年所収）によれば、明治十三年（一八八〇）十一月一日に在京の旧藩士で左内と親交のあった村田氏壽、堤正誼、加藤斌らが湯島の麟祥院（文京区湯島）で記念祭を挙行したのに始まる。同十八年十一月に旧葬地小塚原の回向院（荒川区南千住）に「景岳橋本君碑」を建立。同二十六年に回向院から福井の橋本家菩提寺・善慶寺に移されていた墓石（藜園墓）が再び回向院に戻ってからは、回向院で墓前祭、麟祥院で記念祭を行うことが恒例化した。さ

若越郷土研究 六十八巻二号

らに、同三十五年十月には組織化して景岳会と称し、大々的に慰霊顕彰事業を展開した。また、景岳会の発足と同時に福井では、予め景岳会と呼応連絡して旧藩士・医師の山本匡輔、郷土史家福田源三郎らが「藜園会」を発足し、菩提寺の善慶寺で法要と隣接する妙経寺で遺墨陳列を行うなど活動を展開した。

(19) 『春山教育五十年史』(福井市春山尋常小学校、一九二六年)。

(20) 註(16)に同じ。

(21) 註(19)に同じ。

(22) 福井新聞 昭和九年(一九三四)六月八日付記事(見出し「橋本景岳先生誕生百年祭屋敷跡専念寺で」)。

(23) 『福井空襲史』(福井空襲史刊行会、一九七八年)。

(24) 『福井烈震誌』(福井市、一九七八年)。

(25) 凡例に「平成9年3月現在で掲載」とあるものの、同寺に関しては記述内容が更新されていない。

(26) 井戸杵にも上端などに大きなひび割れが見られ、鉄製のかすがいが打たれている。

(27) 『福井県医学史』(福井県医師会、一九六八年)や、地元の『われらのほこり 橋本左内先生』(うらがまちづくり春山地区委員会・福井市春山公民館、一九九七年)、同『春山のほこり 橋本左内先生』(春嶽公と左内先生の春山づくり委員会・春山地区自治会連合協議会・福井市春山公民館、二〇一二年)にも言及されていない。

(28) 『橋本左内先生誕生百年記念展覧会出陳目録』(景岳会、一九三五年)。「福井評論」十月号 十周年記念(福井評論社、一九三五年)。

(29) 註(28)の出陳目録。

(30) 以下、滋賀貞については『東京在住新福井県人録』(福井県人睦会、一九二八年)。なお、福井市足羽五丁目の瑞源寺に墓石が現存する(昭和二十五年に東京から移設)。

(31) 註(2)に同じ。鍵町は自治会名として存続している。

(32) 「六 忠亮明正云々の書」解説(景岳会『景岳橋本左内遺墨帖』所収、一九四三年)。「若越墓碑めぐり」(若越掃苔会、一九三二年)。福井市足羽五丁目の瑞源寺に墓石が現存する(その一角に滋賀家の墓石もある)。

(33) 「幹事文学士滋賀貞氏の談話」(『景岳会小史』景岳会、一九三五年所収)。

(34) 註(30)に同じ。